

"基盤"の隆起速度では日本第一位の静岡大学(地学散歩(69))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 晃寿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025011

“基盤”の隆起速度では日本第一位の静岡大学

北村 晃 寿

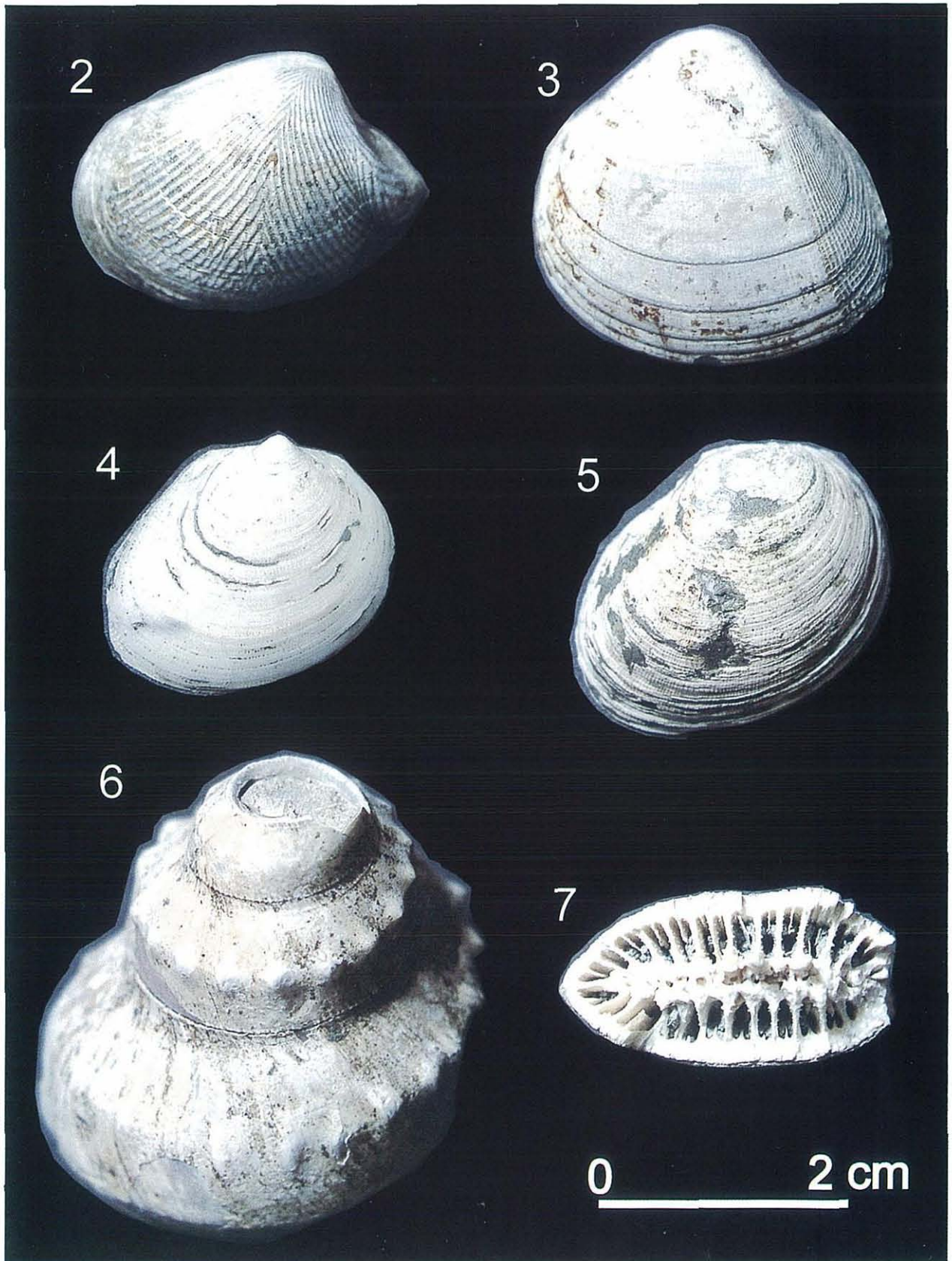
地学散歩 (69)

小泉首相の唱える「聖域なき改革」により、静岡大学を含む全国立大学は国立大学法人へと移行した。この改革と相まって、大学は受験者数、科学研究費の獲得金額、公表論文数、特許件数、COE採択状況などの様々な基準から評価を受け始めたが、静岡大学が日本第一位となるような基準は、見当たらない。こうした“世間一般”の評価基準以外の基準でも、静岡大学が日本第一位となる基準はないのだろうか？実はある。“基盤”の隆起速度である！静岡大学の東部キャンパスの基盤は有度丘陵であり、この丘陵は日本有数の隆起域なのだ。岩波講座「地球科学10 変動する地球 I」の115-116頁には、有度山が約10万年間に300 m 隆起したことが記されている。これほど隆起速度の速い基盤に建てられている大学は日本にはない。カリブ海のバルバドス島の標高60 mにある West Indies 大学の基盤ですら隆起速度は0.44 m/千年だから、世界第一位の可能性も十分ある。

このような高速度の隆起のため、有度丘陵には興味深い地質学的事象を見ることができる。有度丘陵を構成する地層の主体は根古屋層と久能山層であり、両層は約20万年前の礫質ファンデルタの堆積物である。これらの地層は、地質学的に言えば“できたてのほやほや”なので侵食されやすく、前置面に堆積した礫層の部分は数十 m から百十数 m の急崖をなしている (図1)。その代表例は日本平ロープウェイの日本平山頂搭乘口付近や久能山東照宮東に見られる急崖で、久能山層の礫層である。また、底置部に堆積した泥層の部分には深く狭い谷が発達し、その壁面の露頭には水深100 m 前後に生息する二枚貝のオオキララガイ (図2)、シマキンギョガイ (図3)、オオシラスナガイ (図4、5) や巻貝のギンエビスガイ (図6) そして単体サンゴ (図7) などが見られる。地質学的に言えば“ごく最近”、ホモ・サピエンスがアフリカに現れた時代に深度100 m の海底が、今や標高100 m にあるのだ。これほどの“最近の”深場の大型動物の化石を観察できる場所は、日本では有度丘陵だけであり、世界的にも類例がないようである。そのため、有度丘陵の地層や産出化石は、堆積学的にも古生物学的にも大変に貴重なのである。しかも、核心的な問題である“隆起”のメカニズムが未解決である。地質学的価値の高い基盤に建っているという基準でも、静岡大学は日本一といっても過言ではないのだ。正に、有度丘陵は、静岡大学の地球科学教室及び静岡県地学会の今後の発展に有益な資産と言えよう。



1. 有度丘陵に分布する根古屋層(下半部)と久能山層(上半部)の露頭。



2 ; *Acila divaricata divaricata* (Hinds). 3 ; *Keenaea samarangae* (Makiyama).
 4,5 ; *Limopsis belcheri* Adams & Reeve. 6 ; *Ginebis argenteonitens* (Lischke).
 7 ; 単体サンゴ.